『東京大学言語学論集』**41** (2019.9) 155-179

アラビア語チュニス方言において主題をもつ文の並列が意味するもの[1]

熊切 拓
cyberbbn@gmail.com

キーワード: アラビア語　方言　主題化　構文　重文

要旨

本稿は，アラビア語チュニス方言において，主題をもつ文を等位接続詞 *w-* 《そして》によって2つ以上並列させる重文の構文（「主題＋評言　w-主題＋評言」）を取り上げた。この言語の文は，名詞類を述語とする名詞文と，動詞を述語とする動詞文に大きく分けられるが，この構文においては，動詞文のみの組み合わせだけでなく，動詞文と名詞文の組み合わせ，名詞文のみの組み合わせもみられた。この重文構文における意味について，(i) 事態の対立，(ii) 状況や事物の描写，(iii) 事態の時間的近接性の3種に分類し，主題間の関係と，述語の性質とが意味の決定に関わっていることを指摘した。これらの意味に共通する根本的な意味が，2つ以上の事態の提示であると考えられることから，この構文における主題化の機能を，文のグループ化と，動詞文と名詞文の構造的な均等化であるとした。

1. 本稿の目的

本稿の目的は，アラビア語チュニス方言における，(1) のような，主題をもつ文を，等位接続詞によって2つ以上並列させる重文を取り上げる（（1b）における “w-” は，等位接続詞 *w-* 《そして》を表す）。

(1) a. hi:ja　ʕaqlitt-u:　w-hu:wa
　　彼女　認識するPERF.3SG.F-ACC.3SG.M　そして-彼
　　ma:-ʕqal-ha:-ʃ
　　NEG-認識するPERF.3SG.M-ACC.3SG.F-NEG[2]
　　「彼女は彼だとわかったが，彼は彼女だとわからなかった」

---

[1] 本稿は，第156回日本言語学会大会における口頭発表「アラビア語チュニス方言の「SV」語順と主題化」（2018年6月23日，東京大学）を発展させたものである。発表において有益なコメントをくださった方々，とりわけ若狭基道さんに感謝を申し上げる。

[2] 一般的な否定文においては，否定要素，ma:- と -ʃ が述語の前後に現れる。ma:- は否定辞であるが，-ʃ はそうとはいえない。しかし，ここでは否定に関わる要素として否定辞（NEG）のうちに含めておく。

b. 主題　評言 w-主題　評言

こうした重文については，チュニス方言に近い Takurûna 方言において若干の意味記述（Marçais and Guîga 1958-1961: 4242）が見られるのみである。そこで，本稿では，(1) のような構造をもつ重文についてより詳しく記述し，そのうえで，この言語における主題化の機能について考察する。なお，本稿では (1) のような構造をもつ文を「主題化重文構文」と呼ぶことにする。

以下，第2節では，アラビア語チュニス方言の概略，使用した資料について記す。第3節では，この言語の名詞文と動詞文について，第4節では，主題化について概観する。第5節で主題化重文構文が主題をもつ動詞文においてもつ重要性について指摘したのち，第6節では，この構文の型を分類し，動詞文どうしの組み合わせばかりでなく，動詞文と名詞文，名詞文どうしの組み合わせもあることを述べる。第7節では，この構文の意味を，①事態の対立，②状況や事物の描写，③事態の時間的近接性の3種に分類する。第8節ではこの構文における主題化の機能が文のグループ化と動詞文と名詞文の構造的な均等化であることを論じる。第9節は本稿のまとめである。

2. 対象とする言語と資料

2.1. アラビア語チュニス方言

本稿の対象となるアラビア語チュニス方言は，北アフリカのチュニジア共和国の首都チュニスで話されているアラビア語方言の一種である。名詞のクラスは男性（M）・女性（F）に分かれ，単数（SG）と複数（PL）の区別がある。動詞は未完了形（IMPF）と完了形（PERF）と2つの活用の系列があり，人称・数（単数・複数）・性（ただし3人称単数のみ）によって活用する。この言語の主題化に深く関わる対格・属格人称接尾辞（ACC と GEN）について表1にまとめる。

表1. チュニス方言の人称接尾辞

			対格	属格
単数	1人称		-ni:	-ja:/-i:
	2人称		-k/-ik	
	3人称	男	-h/-u:	
		女	-ha:	
複数	1人称		-na:	
	2人称		-kum	
	3人称		-hum	

この言語の音韻についてまとめると，子音としては次の30種が認められる（IPAに準ずる）。/b, m, f, θ, ð, ðˤ, t, tˤ, d, dˤ, n, s, sˤ, z, r, rˤ, l, lˤ, ʃ, ʒ, k, g, x, ɣ, q, ħ, ʕ, h, w, j/。母音は /i, a, u/ およびその長母音 /i:, a:, u:/ の6種である。

2.2. 資料

本稿で扱う資料は，チュニス方言によって記録された物語集（ʕAbd-al-ʕazi:z Al-ʕArwi: 1989,

全4巻[3]）の第1巻に収められた次の3つの物語テクスト（述べ語数で約14,000語）から引用したものである。本稿での引用に際しては，そのページ番号を訳文末の [ ] 内に示した。

(i) mnajjra ja:-mnajjra（「ランプよ，ランプ」，本文は9ページ〜66ページ，約10,000語）
(ii) it-ta:ʒir l-akħal（「黒い商人」，本文は113ページ〜127ページ，約2,600語）
(iii) rˤabb-i jsˤaxxirˤ（「私の主がなんとかしてくださる」，本文は209ページ〜217ページ，約1,600語）

アラビア文字で記されたこれらのテクストを資料として利用するには，アラビア文字では通常は表記されない母音の音価を確定し，文語アラビア語正書法の影響を排除する必要がある。そのため，この方言話者による朗読が不可欠となる。調査にあたり，テクストの朗読の録音と，その語彙と文法に関する調査に協力してくれた Ouacel Krir 氏（チュニス生まれの40代男性）に感謝を申し上げる。

なお，この物語集は，そもそも，ラジオ放送で ʕAbd-al-ʕazi:z Al-ʕArwi: が語ったものを書籍化したものである。その実際の音声資料の多くは，非公式な形でインターネット上で公開されている。しかしながら，本稿で対象とする3つの物語に関していえば，そのような形で入手できる音声資料は今のところ (ii) と (iii) のみに限られているため，本稿においては，音韻的な解釈については，Ouacel Krir 氏による朗読に依拠している。なお，書籍化されたバージョンと，実際に ʕAbd-al-ʕazi:z Al-ʕArwi: が語ったバージョンとでは，若干の違いがあるが，大きなものではない。

物語そのものについて一言すれば，これらの物語が含まれる物語集は，チュニジアの伝統的な口承文芸の記録としては最大のものの1つであり，チュニス方言のみならず，チュニジアの社会と文化の理解に有益な資料である。(i) の物語は，全4巻中最長のものであり，3人姉妹がそれぞれの運命の夫と結ばれるまでの苦難の道のりを描く幻想譚である。(ii) は夫を陥れた「黒い商人」に対する妻の復讐を描く物語，(iii) は貪欲が身の破滅を招くという教訓を含む寓話である。

3. チュニス方言の名詞文と動詞文

本節では，チュニス方言の名詞文と動詞文について，本稿の理解に必要な事項をまとめる。

3.1. 名詞文と動詞文

チュニス方言において，文は主として名詞文と動詞文の2種に分けられる。

名詞文は，名詞，形容詞，分詞，前置詞句，副詞などの名詞類を述語とする文である。名詞

[3] Al-ʕArwi:, ʕAbd-al-ʕazi:z (1989) *ħika:ja:t al-ʕArwi:* Vol. I-IV. 2nd ed. Tunis: Al-Da:r Al-Tu:nisi:ja li-l-Naʃr.

文の述語（これを名詞述語と呼ぶことにする）はコピュラなしで現れる。(2) の等位接続詞以下の名詞文においては，能動分詞 *ra:ʒʕa* が名詞述語となっている。

(2) baʕd-θla:θa ajja:m w-hi:ja **ra:ʒʕa** l-da:rˤ umm-ha:
後-3 日PL そして-彼女 戻るAP.SG.F ～に-家 母-GEN.3SG.F
「三日後，彼女は母の家に戻ることとなった」[13]

これに対し，チュニス方言の動詞文は，主として動詞[4]が述語となる。

(3) **hazz-u**: l-id-da:rˤ
持ち上げるPERF.3SG.M ～に-DEF-家
「彼は彼を家に連れて行った」[114]

名詞文と動詞文の違いは主語と述語との関係にある。名詞文では，名詞述語は主語の性と数を標示するか（形容詞，分詞，一部の名詞の場合），まったく標示しないか（名詞，前置詞句，副詞の場合）のどちらかであるが，動詞文では動詞は主語の性と数だけでなく，その人称も必ず標示する。

3.2. 動詞文の主語

動詞文の述語となる動詞（V）とその主語（S）との関係を見ると，そもそもSの現れないV型，そして主語が明示されるVS型およびSV型の3つの型が存在する。V型は上に挙げた (3) であり，VS型は (4)，SV型は (5) である。

(4) VS型： w-rkib it-ta:ʒir l-akħal
そして-乗ったPERF.3SG.M DEF-商人 DEF-黒い
V : rkib S : it-ta:ʒir l-akħal
「そして，黒い商人は（ラクダに）乗った（＝出発した）」[116]

(5) SV型： si-t-ta:ʒir l-akħal qa:l-l-u:
敬称-DEF-商人 DEF-黒い 言ったPERF.3SG.M-～に-GEN.3SG.M
S : si-t-ta:ʒir l-akħal V : qa:l
「黒い商人殿は彼に言った」[115]

まず，(3) のV型について述べると，この場合，主語は動詞の活用（3人称単数男性）によって標示されており，文脈からこれが“it-ta:ʒir l-akħal”「黒い商人」を指していることがわかる。

---

[4] 動詞文の述語となるのは，動詞のほか，属格人称接尾辞の付された前置詞句，特定の名詞句などがある。

表2. V型・VS型・SV型の出現数とその比率

物語番号	(i)	(ii)	(iii)	(i) + (ii) + (iii)
動詞文の出現数	1428	362	244	2034
V型の出現数とその比率	1108 (77%)	294 (81%)	216 (88%)	1618 (79%)
SV型の出現数とその比率	166 (11%)	38 (10%)	13 (5%)	217 (10%)
VS型出現数とその比率	154 (10%)	30 (8%)	15 (6%)	199 (9%)

(4) のVS型では，動詞 “rkib” 《乗る》の完了形3人称単数男性形の直後に，主語である “it-taːʒir l-akħal” 「黒い商人」が現れている。

これとは逆に (5) では，主語 “si-t-taːʒir l-akħal” 「黒い商人殿」が動詞に先行している。

これらの3つの型は，頻度に違いがある。本稿で対象とする物語テクストにおいて現れた2034例[5]の動詞文のうち，V型，VS型，SV型のそれぞれの出現数をまとめたのが表2である[6]。出現数の直後のカッコ内に示されたパーセントは，動詞文全体においてその型の占めるおおよその割合を表す（小数点以下は切り捨て）。なお，物語番号 (i)，(ii)，(iii)は「2.2. 資料」で述べた3つの物語の題名，(i) “mnajjra jaː-mnajjra”，(ii) “it-taːʒir l-akħal”，(iii) “rˤabb-i jsˤaxxirˤ”に対応し，「(i) + (ii) + (iii)」はその総計である。

これによれば，3つの物語の動詞文，2,034例に対して，V型がほぼ8割の1,618例を占めているいっぽう，SV型，VS型はそれぞれ1割程度しか現れない。すなわち，比率からいうと，動詞文においてはV型がもっともありふれた構文，言い換えれば，無標の構文ということになり，こ

[5] これは本稿で対象とする物語テキストに含まれる文の75%にあたる。

[6] チュニス方言のような活字化の慣習の乏しい言語の活字資料を利用する場合，そこで用いられている句読法に基づき文を取り出すべきかどうかは難しい問題である。とくに，本資料では，その句読法にはしばしば混乱が見られ，信頼できない場合も多い。また，既に述べたように，この物語集は作者 ʕAbd-al-ʕaziːz Al-ʕArwiː がラジオで語った物語を，おそらくは作者の死後，集成したものである。その成立の過程や編集方針については今のところ不明であり，現在 Youtube などで入手できる肉声資料とは若干異なることから，おそらくラジオの音声から採録したというより，放送原稿などをもとにしているのではないかと推測できるに過ぎない。こうした事情から，本節での集計にあたっては，テキストに見られる句読点ではなく，述語を基準にして文を認定した。すなわち，この言語において述語となりうるのは動詞文の場合は主動詞（あるいは動詞と近い働きをする前置詞句など），名詞文の場合は名詞や形容詞などであるが，こうした述語があれば，この述語と，その項となる主語や目的語や付加詞をひとまとめにして文と認めた。一文として数えたものの中には，主語や目的語などが現れずに述語ひとつからなるものもある。また，等位接続詞 w- によって複数の述語が接続されている場合は，まとめて一文と見なさず，その述語ひとつにつき一文とみなした。ただし，集計の対象とする述語は主文に現れたもののみに限り，従属節，関係節，補文，および疑問詞を伴う疑問文の述語については，これらの統語的環境が語順に与える影響を考慮して除外した（もっとも，これらは少数である）。なお，能動分詞や受動分詞は動詞文の述語とは認めず，名詞文の述語として扱った。

れに対し，SV型であれ，VS型であれ，主語が明示されている動詞文は，何か特別な理由により主語が示された有標の構文であると考えられる。

4. チュニス方言の主題化

この節では，動詞文の主題化と名詞文の主題についてまとめる。

4.1. 動詞文における主題化

チュニス方言の動詞文における主題には，主題が評言の前に現れるという語順的な特徴と，主題が評言内部において占めるべき文法的機能を，その主題に人称・性・数の点で一致する代名詞要素（人称代名詞，人称接尾辞，動詞屈折辞）が評言内に再び現れて示すという2つの統語的な特徴が観察される（熊切 2018b: 126）。このような主題化は，日本語の「は」のような主題標識をもたない言語にしばしば観察されるが[7]，チュニス方言ではこれらの言語のなかでも主題化の自由度が高く，主語や目的語ばかりでなく，前置詞の補語や，主語や目的語などを修飾する名詞も主題化されうる。また，二重の主題が現れたり，主題をもつ文自体からさらに主題化することもできる（熊切 2018b: 127-129）。前置詞内の補語の修飾語が主題化された例が (6) である（主題とこれに一致する代名詞要素を太字で示す）。

(6)　**a:na:**　ma:-jitʕadda:-ʃ　iðˤ-ðˤulm　fi:-bla:d-**i:**
　　私　NEG-通るIMPF.3SG.M-NEG　DEF-不正SG.M　～の中-国-GEN.1SG
　「私の国では不正は横行していない（直訳：私は，私の国で不正が横行していない）」
　[126]（熊切 2018b: 126の (26)。ただし，語釈と訳をよりわかりやすくした）

ここでSV型の動詞文に戻ると，この型のSは，前節ではVS型のSと同様のものとして扱ったが，主題化という観点から捉えると，評言の前に現れ，動詞に一致しているという点で，実際には主語ではなく主題であるとみなすことができる。そこで，この主語が主題化されたものをTsと表すとすれば，(5) は，(5') のようにSVではなく，TsVと改めることができよう[8]。

(5')　TsV型：　si-t-ta:ʒir　l-akħal　qa:l-l-u:
　　Ts : si-t-ta:ʒir l-akħal　V : qa:l-l-u:

そこで，これ以降の議論においては，主題一般をTで表し，統語的に区別が必要な場合には，主語（S）が主題化された要素をTs，目的語（O）が主題化された要素をTo，それ以外の補

[7] 中国語（澤田・中川 2004），英語の左方転移構文（西光 2004），スペイン語（福嶌 2004），マテンゴ語（米田 2004）。

[8] 主語が主題化されたものをTsと呼ぶのであれば，それに対応する評言（C）も，動詞が述語となっている場合には，Cvとすべきであろうが，煩雑になるので，本稿ではただVとする。

語（COMP）が主題化された要素をTcompとする。また，SV型についてもTsV型と言い換える。

4.2. 名詞文の主題

名詞文は，以下のように名詞述語とその前に現れる要素からなる（それぞれを太字で示した）。

(7) baʕd-θla:θa ajja:m w-**hi:ja** **ra:ʒʕa** l-da:rˤ umm-ha: (= (2))
後-3 日PL そして-彼女 戻るAP.SG.F ～に-家 母-GEN.3SG.F
「三日後，彼女は母の家に戻ることとなった」[13]

ここで問題となるのは，名詞述語の前に現れるこの *hi:ja* が，主語なのか主題なのかということである。

3.1.で述べたように，名詞文の「主語」は，名詞述語において性と数のみ標示されるか，なにも標示されないかのいずれである。これに対し，動詞文の主題は，評言内の述語において人称・性・数が標示される。それゆえ，述語との一致に関していえば，名詞文の「主語」は動詞文の主題と似ているとはいえない。そのいっぽう，この名詞文の「主語」は，文脈上必要なければ現れないこともある。すなわち，文の必須の要素ではないという点では動詞文の主題と似ている。これをまとめると，この名詞文の「主語」には，主題らしい特徴と，主題らしくない特徴の2つが共存しているといえる。

主題に関する先行研究によれば，言語によって主語と主題の分離の度合いが異なり（柴谷 1990: 124），また述語のあり方により主題の現れ方の異なる場合もある。すなわち，日本語においては，動詞を述語とする事象叙述文の主題が文脈によって決まるのに対して，名詞や形容詞を述語とする属性叙述文の主題の現れ方は文の内的な必要性によって規定されているという（益岡 2004）。そうした事例があることを考慮すると，チュニス方言の名詞文においても，主語であると同時に主題であるような，動詞文と異なる主語・主題のありようを想定することもできる。そこで，本稿では，名詞文の名詞述語の前に現れる要素を動詞文の主題とは異なるタイプの主題とみなし，動詞文の主題，Ts，To，Tcompに対してTnとし，名詞文の一般的構造を(8) のように表すこととする（名詞述語をNとする[9]）。

(8) 名詞文の一般的構造：Tn N

5. TsV型における主題化重文構文

この節では，3つの物語テクストのTsV型の動詞文において，主題化重文構文がどれくらいの

[9] 名詞文の評言をより正確に表せばCnとなろう。

割合を占めているかを検討し，この構文がTsV型の中でもつ重要性を述べる。

表2で示したように，本稿の調査の対象となる物語テクストにおいて，TsV型は，全動詞文の11%にあたる217例あった。この217例のうち，主題化重文構文に含まれると明白に判断できるものは76例であった[10]。これは，TsV型全体のおよそ35%にあたり，主題化重文構文はTsV型の主要な用法のひとつであるといってよい。それゆえ，主題化重文構文は，チュニス方言においてTsV型と主題がそれぞれいかなる機能を果たしているかを考察する上で重要な構文であると考えられる。

主題化重文構文ではない残りのTsV型の141例にどのようなものが含まれ，これをどう分類するかは，これからの課題であるが，はっきりと区別できる構文の集合はいくつか認めることができる。主題化重文構文とは明確に異なることを示すために，主要な構文を以下に挙げる（Tsを太字で示した）。

(9) **a:na**: naʕraf-ha:
私　知るIMPF.1SG-ACC.3SG.F
「私は彼女を知っている」[116]

(10) **illi**: **ʕand-ik** jikfi:-k
関係詞　～にある-GEN.2SG　十分であるIMPF.3SG.M-ACC.2SG
「あなたにあるものはあなたにとって十分である」[215]

(11) w-l-ma:l[11] **kull** **ħadd** jqaddr-u:
そして-DEF-財産SG.M　すべて　ひと　尊敬するIMPF.3SG.M-ACC.3SG.M
w-jʕaðˤðˤm-u:　w-jbaʒʒl-u:
そして-讃えるIMPF.3SG.M-ACC.3SG.M　そして-敬うIMPF.3SG.M-ACC.3SG.M
ħatta:　mi-l-mlu:k　w-s-sla:tˤi:n
～すら　～から-DEF-王PL　そして-スルタンPL
「そして財産はといえば，あらゆる者がこれを尊敬し，讃え，敬うのであり，王やスルタンの間ですらそうである」[124]

(12) **ir-ru:ħ** xarʒit mi-r-ru:ħ
DEF-魂SG.F　出るPERF.3SG.F　～から-DEF-魂SG.F
「その魂は（同じ）魂から出た（＝相思相愛の仲）」[113]

(13) ilju:m　in-nha:rˤ　il-kull　w-**hi:ja**　tixdim
今日　DEF-日　DEF-すべて　そして-彼女　働くIMPF.3SG.F
「今日は一日中，彼女は働いている」[32]

---

[10] 主題化重文構文が2つ以上のTsV型からなることも多いが，その場合は，まとめてひとつとせずに，あくまでも構文に現れたTsV型の数を数えた。したがって，この76例がそのまま主題化重文構文の数となるわけではない。

[11] なお，この (11) は，動詞目的語の l-ma:l も主題化された二重の主題を持つ文である。

(9) は，物語中の会話において，1人称・2人称の独立人称詞が主題化される例の1つで，これは16例あった。(10) のように関係節や長い名詞，(11) のような *kull*《すべての，どの》を含む名詞句などが主語の場合も，TsV型になることが多い（合わせて14例）。(12) のように動詞の主語と目的語・前置詞補語のいずれもが独立した名詞句である場合にも，主語が動詞の前に現れること多いようだ（13例）。(13) は，ある期間を表す名詞句が接続詞 *w-* によってTsVと接続される構文であり，これはその期間の間中，TsVで表される事態が継続していたことを表す（7例，なお名詞文が *w-* に後続している (2) も参照されたい）。

残り約90例のTsVについていえば，その機能は上に挙げた小規模なグループほどははっきりとしていない。既出の (4) の例もこのグループに含まれるが，ここでは，動詞の主格が何に一致するのかを文脈上明示する必要から，主語が主題化されているようである。すなわち，(4) の前の文を含めて改めて (14) として引用するが，ここでは，2人の男性の雑談のテーマの変化という状況描写から，具体的な会話の描写へと移るさいに，主題化によって，主語を動詞の前に置き，まず誰が発言したかを明示しているとも仮定できる。

(14) ħatta: wsˤul l-aħdiːθ ʕlaː-ʕaːjlaːt-hum ħatta:
ついに 着くPERF.3SG.M DEF-話SG.M ～について-家族PL-GEN.3PL ついに

walla: l-aħdiːθ ʕa-n-nsaː
～になるPERF.3SG.M DEF-話SG.M ～について-DEF-女PL

si-t-taːʒir **l-akħal** **qaːl-l-u:**
敬称-DEF-商人 DEF-黒い 言ったPERF.3SG.M-～に-GEN.3SG.M

aːna: ʕaːjiʃ waħd-iː
私 生きるAP.SG.M ひとり-GEN.1SG

「やがて（黒い商人と旅の商人の）雑談は，それぞれの家族についての話に至り，さらに妻の話になった。<u>黒い商人殿は彼に言った</u>。『私は独り者です』」[115]

しかしながら，他のTsVの例については，この (14) のように解釈できないものも多く，ここで述べた，「主題化には主格の一致対象を文脈上明示する機能がある」という仮説の妥当性も含めて，さらなる検討が必要である。いずれにせよ，ここで挙げた (9) から (13) の例は単文であり，重文である主題化重文構文とははっきりと区別できる。

6. 主題化重文構文の構造

主題化重文構文がいかなるものであるかについては，すでに (1) の2つの動詞文によって形成された例で示したが，用例を全体として見渡すと，この構文には動詞文のみならず，名詞文も現れることがわかる。また，主語以外の要素が主題化されていることもある。そこで，本節では，文のタイプの組み合わせにどのようなものがあるかを整理する。

主題化重文構文は，3つの物語テクストにおいて58例[12]あり，そのうち，動詞文のみによるものが30例，動詞文と名詞文の組み合わせによるものが18例，そして名詞文のみによるものが10例であった。そして，動詞文のみによるもので最もよく見られるものは，(1) のような主語が主題化された動詞文の組み合わせによるものであり，26例がこれであった。残りの4例が，主語以外の要素が主題化された動詞文を含む主題化重文構文である。したがって，主題化重文構文の典型的な例は，最も数の多い「主語が主題化された動詞文」によるものであるということができる。

そこで，以下，まず動詞文のみによる主題化重文構文を取り上げ，次に動詞文と名詞文の組み合わせによるものと名詞文のみによるものを順にまとめ，最後にこの構文の一般的構造を示す。なお，例文においては主題を太字で示す。

6.1. 動詞文のみによる主題化重文構文

動詞文のみによる主題化重文構文は，主語が主題化された動詞文（すなわちTsV）のみによるものと，主語以外の要素が主題化された文も含むものとに分けられる。順にそれぞれの記述を行う。

6.1.1. TsVのみによる主題化重文構文

TsVのみの主題化重文構文は一般に次のような構造をもつ。

(15)　TsV　w-TsV

具体的には次のような例である。

(16)　**hi:ja**　ʕaqlitt-u:　　w-**hu:wa**
　　彼女　認識するPERF.3SG.F-ACC.3SG.M　　そして-彼
　　ma:-ʕqal-ha:-ʃ　　(=(1a))
　　NEG-認識するPERF.3SG.M-ACC.3SG.F-NEG
　　「彼女は彼だとわかったが，彼は彼女だとわからなかった」[120]

それほど多くはないが，3つ以上のTsVからなる主題化重文構文も存在する。(17) は4つのTsVからなっている。

(17)　TsV　w-TsV　w-TsV　w-TsV

[12] この58例には，補文として現れた5例の主題化重文構文も含めた。この5例には8つのTsVが含まれ，これと，第5節の冒頭で述べた，主文の主題化重文構文に含まれる76例を足した84例が，3つの物語における主題化重文構文に現れるTsVの総数となる。

l-aʕʃi:ja ʕʃa:t w-**d-dinja**: dwa:t
DEF-夕方 日が暮れるPERF.3SG.F そして-DEF-世界SG.F 鳴り響くPERF.3SG.F

w-**r-rʕad** raʕʕid w-**l-barq** lʕiʒ
そして-DEF-雷鳴 轟くPERF.3SG.M そして-DEF-稲光 ピカッと光るPERF.3SG.M

「夕方になり，あたりが鳴り響き，雷鳴が轟き，稲光が光った」[35]

6.1.2. 主語以外の要素が主題化された文を含む主題化重文構文

主題化重文構文を構成する動詞文のいずれかが，主語ではなく，目的語もしくは前置詞補語を主題化したものものは，4例ある。そのうちの3例をここに挙げる。(18) は，第2文の動詞文の主題が目的語にあたり（TsV w-ToV），(19) は，その逆である（ToV w-TsV）。(20) では第2文の動詞文の主題が前置詞補語に一致している（TsV w-TcompV）。なお，主語以外の主題化された要素と，これに一致して再述される代名詞要素も太字で示す。

(18) TsV w-ToV
ra:s-u: jfallaq w-**ʕi:ni:-h**
頭-GEN.3SG.M 割れるIMPF.3SG.M そして-目PL-GEN.3SG.M

bissi:f jħill-**hum**
むりやりに 開けるIMPF.3SG.M-ACC.3PL.M

「彼の頭は割れるようで，彼の目はむりやりにこれを開ける（ありさま）」[124]

(19) ToV w-TsV
il-ba:b ma:-ka:nu: jħillu:-**h** illa: baʕd-sa:ʕti:n
DEF-門SG.M NEG-(過去標示) 開けるIMPF.3PL-ACC.3SG.M ～以外 後-2時間

wlla: θlaθa w-**hu:ma** jʕarʕdu:
～か 3 そして-彼ら ひどく苦労するIMPF.3PL

「門は2～3時間かかって彼女たちがようやくそれをこじ開け，彼女たちはひどい苦労をしました」[120]

(20) TsV w-TcompV
itˤ-tˤurħ **l-u:l** ma:-wfa:-ʃ w-**wxajj-na**:
DEF-勝負 DEF-最初の NEG-終わるPERF.3SG.M-NEG そして-兄弟-GEN.1PL

xða: fi:-**h** ir-rabb ma: ʕtˤa:
取るPERF.3SG.M ～において-GEN.3SG.M DEF-主 関係詞 与えるPERF.3SG.M

「最初の（チェスの）勝負が終わらないうちに，我らが兄弟（＝主人公）はといえば，（密かに盛られた睡眠薬によって）主が，自ら与えたもの（＝命）を彼においてお取り上げになった（＝死んだ，もしくは気を失った）」[122]

6.2. 動詞文と名詞文の組み合わせによる主題化重文構文

主題化重文構文は，動詞文と名詞文という異なるタイプの文によっても形成され，名詞文が

前半に現れるもの（TnN w-TsV）と，後半に現れるもの（TsV w-TnN）の2種類がある。まず，前者の例を挙げる。

(21) TnN w-TsV

tra:b-i: ki-l-fuðˤðˤa w-**mu:ʒ-i:** jitla:tˤim
土-GEN.1SG ～のよう-DEF-銀 そして-波-GEN.1SG ぶつかり合うIMPF.3SG.M

l-is-sma:
～に-DEF-空

「（擬人化された海が語って）私の砂浜は銀のよう，私の波は空にぶつかる（ほど高い）」[211]

次の (22) は，名詞文が2番目に現れるれるタイプの例である。

(22) TsV w-TnN

hi:ja ki:f tqu:l wild ʕamm-i: ma:-taʕrif-ʃ
彼女 ～とき 言うIMPF.3SG.F 息子 おじ-GEN.1SG NEG-知るIMPF.3SG.F-NEG

ki:fa:ʃ tqu:l-ha: w-**hu:wa** la: maʕbu:d bilħaqq
どのように 言うIMPF.3SG.F-GEN.3SG.F そして-彼 NEG 崇拝者 本当に

illa-lˤlˤa:h
～以外-神

「彼女は『わたしのおじの息子（＝夫）よ』と言う時に（恥じらいのあまり）どのようにそれを言えばいいのかわからず，彼は神以外を本当に崇拝する者ではない（＝この世で一番彼女を愛している）」[113]

6.3. 名詞文のみによる主題化重文構文

名詞文のみの組み合わせによる主題化重文構文も存在する。

(23) TnN w-TnN

a:na: naxla na:bta fi:-aʕazz tra:b
私 デーツの木SG.F 生えるAP.SG.F ～の中-もっとも高貴な 土

w-**ʒins-i:** ʕzi:z w-ɣa:li:
そして-種族SG.M-GEN.1SG 高貴SG.M そして高いSG.M

「わたしはもっとも貴い土に生えたデーツの木であり，我が種族は高貴で高級だ」[211]

6.4. 主題化重文構文の一般的構造

本節においては，主題化重文構文を，その述語によって，大きく3つのグループに分けた。それらをまとめると，(24) のようになる。

(24) a. TsV w-TsV (w-TsV…) (6.1.1.) / ToV w-TsV / TsV w-ToV / TsV w-TcompV (6.1.2.)
b. TsV w-TnN / TnN w-TsV (6.2.)
c. TnN w-TnN (6.3.)

「4.2. 名詞文の主題」において，この言語における動詞文の主題と名詞文の主題の違いについて触れたが，この構文においては，(24b) にみられるように，動詞文の主題Tsと名詞文の主題Tnはどちらも同じ場所に現れることができ，両者を区別をする必要はないと考えられる。そこで，Ts，To，TcompとTnをTとしてまとめ，さらにVとNを述語（P）とすると，主題化重文構文の構造は (25) のように一般化できよう[13]。

(25) TP w-TP（ただし，さらに複数の w-TP が後続する場合もある。）

そこで，次節では，これらの共通した構造をもつ主題化重文構文が構文としていかなる意味をもつかを明らかにする。

7. 主題化重文構文の意味

この主題化重文構文の機能については，チュニス方言に近い Takroûna 方言を扱った Marçais et Guîga（1958-1961: 4242）において，接続詞 *w-* の用法のひとつとして記述され，そこでは主として「〜のいっぽう〜」あるいは「〜に反して〜」といった対立性に関心が向けられている。確かに，本稿で取り上げた例でも (1) のように主題の対立として捉えられるものもある。しかし，対立性のみでは説明できない例もある（例えば (20) や (21)）。それゆえ，本稿ではこの対立性を踏まえた上で，それに含まれ得ない意味を考慮し，これらの主題化重文構文の意味を，次の3つに分類し，そのそれぞれについて検討する。

(26) 主題化重文構文の3つの意味
a. 事態の対立を表す
b. 状況や事物を描写する
c. 事態の時間的近接性を表す

7.1. 事態の対立を表す主題化重文構文

主題化重文構文は，ある2つの事態の対立を表す。その場合，この構文に含まれる2つの主題は，一方を定めれば，もういっぽうが，文脈上，自動的に決まる二項対立の関係にあり，2つの述語は，対義的，もしくは肯定・否定の関係にある。

(27) TnN w-TnN

[13] ここでのPは評言Cのことである。

wa:ħid　qilli:l　w-**wa:ħid**　ɣni:
ひとりSG.M　貧しいSG.M　そして-ひとりSG.M　金持ちであるSG.M
「（兄と弟がいた。）ひとりは貧しく，ひとりは金持ちだ」[209]

(27) における2つの主題「ひとり（単数男性）」は定冠詞のない不定名詞であるが，先行する文に含まれる「兄弟」という語から，これがそれぞれ「兄弟」のどちらかを指すことがわかる。述語はいずれも形容詞であり，名詞述語であり，「貧しい」と「金持ち」という対義関係にある。

次の (28) はTsV型による主題化重文構文である。

(28) TsV　w-TsV
hi:ja　ʕaqlitt-u:　w-**hu:wa**
彼女　認識するPERF.3SG.F-ACC.3SG.M　そして-彼
ma:-ʕqal-ha:-ʃ　(=(1a))
NEG-認識するPERF.3SG.M-ACC.3SG.F-NEG
「（文脈：女召使いが男に身をやつして，自分の主人を探す旅に出る。そして異国の地で変わり果てた姿の主人を発見する。）彼女は彼だとわかったが，彼は（男装しているので）彼女だとわからなかった」[120]

この例が現れる場面に登場しているのは，女召使いと，その主人だけであり，したがって，文脈的に片方が決まるともう片方が自動的に決まる関係にある。また，述語は肯定・否定という対極的関係にある。

7.2. 状況や事物を描写する主題化重文構文

主題化重文構文は，ある状況や事物などの対象に関係する事態を複数列挙して述べることで，重文全体としてその対象を描写する。

この用法は，事態の対立を表す場合とは，(i) 主題の性質，(ii) 主題をもつ文の数，(iii) 構文全体でひとつの意味を表す，という3つの点で異なる。

(i) 主題の性質

事態の対立を表す場合，構文に含まれる主題は，片方が決まればもういっぽうが決まる二項対立の関係にあったが，状況や事物を描写する場合にはそのような関係はない。そのかわり，その構文をなす複数の主題は，描写されるある状況や事物に備わる特徴的な事物である点で共通している。(29) は動詞文のみ，(30) は動詞文と名詞文の組み合わせ，(31) は名詞文のみの例である。なお (29) の複数形の「目」は単数女性扱いとなる。

(29) TsV w-TsV

wiʒh-u:	laxlax	w-**ʕi**:**ni**:**-h**	tɣarrbit
顔-GEN.3SG.M	黄色くなるPERF.3SG.M	そして-目-GEN.3SG.M	外国に行くPERF.3SG.F

「彼の顔は生気を失い，彼の目は異国に行った（＝虚ろになった）」[119]

この例では，「彼の顔」と「彼の目」を主題とする文によって「彼」が激しいショックを受けた様子が描写されている。次の例は食材が腐敗している情景を，「虫」と「悪臭」という主題によって描写する文である。

(30) TsV w-TnN

id-du:**d**	juhmur	w-**ri**:**ħa**	**ku**:**li**:**ra**	xa:rʒa
DEF-虫	這い回るIMPF.3SG.M	そして-匂いSG.F	コレラ	出るAP.SG.F
min-hum				
〜から-GEN.3PL				

「虫が這い回り，コレラのような悪臭がそれら（腐った食材）から漂い出ている」[14]

(31) では「彼の口」と「彼の目」を主題とする文によって，「彼」が変身している魔犬の恐ろしげな姿が描写されている。

(31) TnN w-TnN

fumm-u:	maħlu:l	w-**ʕi**:**ni**:**-h**	ki:f-qtˤa:ʕi:	n-na:rˤ
口-GEN.3SG.M	開くPP.SG.M	そして-目-GEN.3SG.M	〜のような-かけら	DEF-火

「彼の口は開かれ，彼の目は火花のようである」[64]

すでに挙げた (18) では，「彼の頭」と「彼の目」を主題化した文によって，その人物の朦朧とした姿が，(21) では，海である「私」の「土」と「波」を主題化した文によって，「私」の特徴が，(23) では，「私」と植物としての「種族」を主題化した文によって，「私」の特徴が描写されている。

(ii) 主題をもつ文の数

事態の対立を表す用法においては，主題化重文構文に現れる主題は，2つで対をなすものであり，したがって，この構文に含まれる文は2つであった。これに対し，状況や事物を描写する用法においては，描写する対象さえ同じであれば，主題は2つに限られることはない。そのため，主題化重文構文に含まれる文が2つ以上になる場合もある。(32) においては，主題化された「漆喰塗り屋」，「ペンキ屋」，「すべての人々」がそれぞれの働きを行っていることを述べる3つの文によって，王子の盛大な婚儀を控えた王国の慌ただしい状況が描写されている（なお，以下の例において職業を表す名詞の複数は女性単数に一致する）。

(32)　TsV　w-TsV　w-TsV

il-bajja:ðˤa　tbajjiðˤ　w-**d-dahha:na**
DEF-漆喰塗り屋PL　漆喰を塗るIMPF.3SG.F　そして-DEF-ペンキ屋PL

tidhin　w-**in-na:s**　il-kull　jzajjnu:
ペンキを塗るIMPF.3SG.F　そして-DEF-人々　DEF-すべて　飾り付けるIMPF.3SG.PL

fi:-ḏja:r-hum　w-ħwi:nit-hum
〜の中-家PL-GEN.3PL　そして-店-GEN.3PL

「漆喰塗り屋たちは漆喰を塗り，ペンキ屋たちはペンキを塗り，すべての人々は自分たちの家や店を飾り付けている」[48]

(iii) 構文全体でひとつの意味を表す

2つの事態を対立させる用法とは異なり，状況や事物を描写する用法においては，複数の事態によって，ひとつの状況や事物の様子が表されている。すなわち，上述の (18) は全体として黒い商人の朦朧とした様が，(29) は全体として商人がショックを受けた様子が，(30) は全体として食材の腐敗した様子が，(31) は全体として魔犬の恐ろしげな姿が表されている。また，(21) と (23) で表されているのは，海なりデーツの木なりの立派さである。

主題をもつ複数の文の組み合わせによって，全体としてひとつの状況・事物が表されるということは，逆向きに捉えれば，ある状況を描写するために，特定の主題化重文構文が用いられうるということである。すなわち，ある特定の主題化重文構文がある状況を描写するための定型的表現として定着することもありうる。その例が，上で扱った (32) である。これとほぼ同じ表現が，「婚儀や祭りに備える町の慌ただしさ」を表す慣用表現として，物語集ではしばしば繰り返されている。つぎは (32) の前のページに現れた例である。

(33)　TsV　w-TsV

l-bajja:ðˤa　tbajjiðˤ　w-**d-dahha:na**
DEF-漆喰塗り屋PL　漆喰を塗るIMPF.3SG.F　そして-DEF-ペンキ屋PL

tidhin　kull　da:rˤ　kull　ħa:nu:t
ペンキを塗るIMPF.3SG.F　すべて　家　すべて　店

「すべての家，すべての店に，漆喰塗り屋たちは漆喰を塗り，ペンキ屋たちはペンキを塗っている」[47]

今回の物語テクストでは確認できなかったが，(29) はひどいショックを受けた人，(30) は何かが腐敗した様子を表す慣用表現である可能性もある。

7.3. 事態の時間的近接性を表す主題化重文構文

主題化重文構文は，そこに含まれる文の述べる複数の事態の時間的近接性を表す場合もあ

る。他の2つの用法とは異なり，この用法では，主題は，文脈を共有していれば，対をなしていなくてもよく，また，なんらかの状況や対象の特徴という点で共通していなくてもよいようだ。事態の時間的近接性は，述語の性質により (i) 同時的継起と (ii) 背景に対する変化との2つに分けられる。

(i) 同時的継起

主題化重文構文の2つの述部が動詞文で，さらにいずれも完了形である場合，複数の事態が同時に，もしくはほとんど同時とみなしていいほどにすぐに継起することを表す。「～するやいなや」「～すると同時に」と訳すことができる[14]。

(34) TsV w-TsV

ajja:	**wxajj-na**:	wsˤul	l-ha:k-il-bla:d	w-**si-t-ta:ʒir**
さて	兄弟-GEN.1PL	到着するPERF.3SG.M	～に-かの-DEF-国	そして-敬称-DEF-商人

l-akħal	tlaqqa:-h
DEF-黒い	出迎えるPERF.3SG.M-GEN.3SG.M

「さて，我らが兄弟（＝主人公）がこの国に到着するやいなや，（異国の商人を食い物にしている）黒い商人殿が彼を出迎えた」[114]

(35) TsV w-TsV

hu:wa	bhiz	ʕli:-ha:	w-**sˤ-sˤʒi:r**	qa:l
彼	襲いかかるPERF.3SG.M	～に-GEN.3SG.F	そして-DEF-こども	言うPERF.3SG.M

wa:ʕ
オギャア

「（呪いによって悪魔の犬に変身している）彼が（妻である）彼女に向かって飛びかかったまさにその時，（妻が産み落としたばかりの）赤ん坊が「オギャア」と泣いた（その瞬間，この泣き声がきっかけとなって，彼にかけられていた呪いが解け，妻は助かる）」[64]

(ii) 背景に対する変化

主題化重文構文の第1文の内容が，第2文以降の事態の背景をなす場合があり，「～していると～」「～するうちに」などの訳を与えることができる。この場合，第1文の述部は，動詞でも名詞述語でもありうるが，共通しているのは，いずれにしても未完了もしくは継続アスペクト的であることである。第2文以降の述部は多くが動詞であり，完了形のこともあれば，未完了形のこともある。次の (36) は，名詞述語である前置詞句を述部とする名詞文と完了形の動詞文からなり，「彼女が市場にいる」状況を背景にした男の出現を述べている。

---

14 これと同じ意味は，habr-ma:《～するやいなや》，du:b-ma《～するやいなや》などの接続詞を用いた複文でも表すことができる。

(36) TnN w-TsV

ma:tqu:linti:　baʕd-θlaθa　wlla:　arbʕa　ajja:m　**hi:ja**　fi:-su:q-sˤ-sˤu:f
いってみれば　後-3　もしくは　4　日PL　彼女　～の中-市場-DEF-羊毛

w-**rˤ-rˤa:ʒil**　wquf　ʕli:-ha:
そして-DEF-男　立つPERF.3SG.M　～に-GEN.3SG.F

「いってみれば3日か4日経って，彼女が羊毛の市場にいると，あの男が彼女の前に立ったのでした」[12]

(37) TsV w-TcompV

itˤ-tˤurħ　**l-u:l**　ma:-wfa:-ʃ　w-**wxajj-na:**
DEF-勝負　DEF-最初の　NEG-終わるPERF.3SG.M-NEG　そして-兄弟-GEN.1PL

xða:　fi:-**h**　ir-rabb　ma:　ʕtˤa:　(=(20))
取るPERF.3SG.M　～において-GEN.3SG.M　DEF-主　関係詞　与えるPERF.3SG.M

「最初の（チェスの）勝負が終わらないうちに，我らが兄弟（＝主人公）はといえば，（密かに盛られた睡眠薬によって）主が，自ら与えたもの（＝命）を彼においてお取り上げになった（＝死んだ，もしくは気を失った）」[122]

(37) の第1文の述語は完了形であるが，この述語は否定されており，それゆえ文としては「終わっていない」という未完了の状態を表している。6.1.1.に挙げた (19) の例も，扉を開くまでかかった時間のあいだの，「彼女たち」の苦労が語られている。

7.4. 主題化重文構文の3つの意味の関係

ここでは，これまで扱った主題化重文構文の3つの意味のうち，事態の対立を表す意味にも状況や事物を描写する意味にも捉えられる例，そして状況や事物を描写する意味にも事態の時間的近接性を表す意味にも捉えられる例を挙げ，これらの3つの意味がはっきりと分けられるものではないことを述べる。

すでに (22) としてあげた次の例は，物語に登場する夫婦の情愛の深さが表現されている。

(38) TsV w-TnN

hi:ja　ki:f　tqu:l　wild　ʕamm-i:　ma:-taʕrif-ʃ
彼女　～とき　言うIMPF.3SG.F　息子　おじ-GEN.1SG　NEG-知るIMPF.3SG.F-NEG

ki:fa:ʃ　tqu:l-ha:　w-**hu:wa**　la:　maʕbu:d　bilħaqq
どのように　言うIMPF.3SG.F-GEN.3SG.F　そして-彼　NEG　崇拝者　本当に

illa-lˤlˤa:h　(=(22))
～以外-神

「彼女は「わたしのおじの息子（＝夫）」と言う時に（恥じらいのあまり）どのようにそれを言えばいいのかわからず，彼は神以外のものの真の崇拝者ではない（＝この世で

一番彼女を愛している）」」[113]

この場合，「夫」と「妻」を二項対立的なものとして捉えれば，「夫は〜，かたや妻は〜」と対立性を表すが，ここで述べられている事態そのものは対立的なものとはいえないので，「夫婦」の仲睦まじい様子を構文全体として描写していると理解することもできよう。

次に，状況や事物を描写しているとも，事態の時間的近接性を表しているとも解釈できる例を2つあげる。

(39) TnN w-TsV

w-**l-ʕzu:za** umm-hum kull marra ʕand-waħda
そして-DEF-老婆 母-GEN.3PL すべて 回 〜のところに-ひとりSG.F

min-bna:t-ha: w-**hu:ma** jitʕa:rku:
〜のうち-娘PL-GEN.3SG.F そして-彼女たち 互いに争うIMPF.3PL

ʕli:-ha: a:ma:-hi:ja illi: tʃidd-ha:
〜について-GEN.3SG.F どちらが-彼女 関係詞 つかむIMPF.3SG.F-GEN.3SG.F

akθar
より多く

「そして彼女たちの母である老婆が娘たちのうちの1人のところにいるといつも，彼女たちは，自分たちのうちどちらがより長く母親を引き止めておけるかと，母親を取り合います」[66]

(40) TsV w-TsV w-TsV w-TsV

l-aʕʃi:ja ʕʃa:t w-**d-dinja**: dwa:t
DEF-夕方 日が暮れるPERF.3SG.F そして-DEF-世界SG.F 鳴り響くPERF.3SG.F

w-**r-rʕad** raʕʕid w-**l-barq** lʕiʒ (=(17))
そして-DEF-雷鳴 轟くPERF.3SG.M そして-DEF-稲光 ピカッと光るPERF.3SG.M

「夕方になり，あたりが鳴り響き，雷鳴が轟き，稲光が光った」[35]

第1文が名詞文，第2文が未完了形の動詞文である (39) は，物語（(i) mnajjra ja:-mnajjra）の末尾に置かれたものである。ここでは，結末として，老婆もその娘たちも仲良く幸せに暮らす「めでたしめでたし」という状況が全体として描写されているが，その描写は，名詞文によって表された「老婆が娘のうちの1人の家に滞在する」という状況を背景として「その娘が母親を独り占めしようと姉妹どうしで取り合う」という事態が常に起きるという2つの事態の時間的近接性（より厳密には「(ii) 背景に対する変化」）を述べることによってなされている。(40) も，おどろおどろしい天候を，気象現象がつぎつぎと継起している様子によって描写している。

このように，本節で述べた主題化重文構文の3つの意味は，はっきりと分けられるものでは

なく，重なり合っていると考えられる。

7.5. 主題化重文構文の意味を決める要因

ここで，主題化重文構文の3つの意味について，主題と述語の観点からまとめると次のようになろう。

1. 主題化重文構文が事態の対立を表す場合，その2つの主題は二項対立の関係にあり，述語は対義的もしくは肯定・否定の関係にある。
2. 主題化重文構文が状況や事物を描写する場合，その主題は，描写する状況・対象に備わる特徴的な事物であるという点で共通しており，主題も2つ以上現れうる。
3. 主題化重文構文が事態の時間的近接性を表す場合，主題は文脈を共有していれば，特に制限なく現れうる。述語のアスペクトによって意味が変わる。

述語の性質ももちろんであるが，主題化重文構文の意味を決める要因として，そこに含まれる主題が互いにどのような関係にあるかも重要であるということになる。以下の (41), (42), (43) は，いずれも2つの完了形動詞文の組み合わせ（TsV w-TsV）による主題化重文構文であるが，その意味の違いには主題どうしの関係が強く関与していると考えられる。すなわち，事態の対立を表す (41) は「彼女（女召使い）」と「彼（主人）」しか登場しない文脈に現れ，それゆえ2つの主題は二項対立の関係にある。これに対し，構文全体が「彼」についての描写として機能している (42) では，「彼の顔」や「彼の目」という主題は「彼」に備わる事物である点で同等の関係にある。事態の時間的近接性を表す (43) では，2つの主題は (41) のように対立関係にあるわけでも，(42) のように共通の状況・対象に備わっているわけでもない。

(41) 事態の対立：

hi:ja ʕaqlitt-u:　　w-**hu:wa**
彼女 認識するPERF.3SG.F-ACC.3SG.M　そして-彼
ma:-ʕqal-ha:-ʃ　　(=(1a))
NEG-認識するPERF.3SG.M-ACC.3SG.F-NEG
「彼女は彼だとわかったが，彼は彼女だとわからなかった」[120]

(42) 状況や事物の描写

wiʒh-u:　laxlax　w-**ʕi:ni:-h**　tɣarrbit　(=(29))
顔-GEN.3SG.M　黄色くなるPERF.3SG.M　そして-目-GEN.3SG.M　外国に行くPERF.3SG.F
「彼の顔は生気を失い，彼の目は外国に行った（＝虚ろになった）」[119]

(43) 事態の時間的近接性

hu:wa	bhiz	ʕli:-ha:	w-**sˤ-sˤɣi:r**	qa:l
彼	襲いかかるPERF.3SG.M	〜に-GEN.3SG.F	そして-DEF-こども	言うPERF.3SG.M

wa:ʕ (=(35))

オギャア

「（呪いによって悪魔の犬に変身している）彼が（妻である）彼女に向かって飛びかかったまさにその時，（妻が産み落としたばかりの）赤ん坊が「オギャア」と泣いた（その瞬間，この泣き声がきっかけとなって，彼にかけられていた呪いが解け，妻は助かる）」[64]

ただし，前のセクションで見たように，主題が二項対立的であっても，事態が対立していない場合や，主題が状況・対象に備わる特徴的な事物とも，ただ単に文脈上共通しているとも捉えられる場合は，3つの意味のどれに属すのかはっきりと決められないこともある。

そうした中間的な例があるにしても，主題どうしの関係を基準にして，主題化重文構文の意味を次のようにまとめなおすことができよう。

(44) 主題化重文構文における主題と意味の関係

a. 二項対立的な主題：事態の対立を表す

b. 状況・対象に備わる特徴的な事物が主題：状況や事物を描写する

c. 文脈上共通する主題：事態の時間的近接性を表す

8. 主題化重文構文と主題化

本節では，主題化がこの構文の意味にどのように関わっているかを考察する。

前節で述べたのは，主題どうしの関係と述語の性質という2つの要因により，事態の対立の表示，状況や事物の描写，事態の時間的近接性の表示という意味の違いが生じるということであった。ここで，これらの3つの意味の共通性を考えると，それは，2つ（場合によってはそれ以上）の文をひとつのグループとして提示するということにあり，この「文のグループ化」という機能が，主題化重文構文のもっとも根本的な意味であるといえる。この構文においては，この文のグループ化を基盤に，主題どうしの関係や述語の性質が実際の意味を決定する要因として働くのである。

そこで，次に問わねばならないのは，主題化重文構文の，文をグループとして提示するという根本的な機能がいかなる仕組みによって生じているかということである。それは，接続詞 *w-* による結合，もしくは，2つの文の並列によるものであろうか。主題化されていない動詞文を扱った (45) の例から判断できるのは，そのいずれでもないということである。

(45) a. V w-V w-VS

xalla:-l-ha:　mu:nit-ʕa:m　ʕla:-ma:
残すPERF.3SG.M-〜に-GEN.3SG.F　食料-1年　〜のため-関係詞

jwa:li:　ba:lik　tˤtˤawwil-ʃi:
後に続くIMPF.3SG.M　もしかしたら　長引くIMPF.3SG.F-疑問

s-safra　mta:ʕ-u:　**w-rkib**　**w-qaʕdit**
DEF-旅　〜の-GEN.3SG.M　そして-乗るPERF.3SG.M　そして-留まるPERF.3SG.F

hi:ja　w-xdi:mit-ha:
彼女　そして-女召使い-GEN.3SG.F

「彼は，万が一旅が長引いたらと，今後のことのため，一年分の食料を彼女に残し，（ラクダに）乗り（＝出発し），彼女と女召使いは留まった」[113]

b. VS　VS

tˤa:h　l-li:l　**ʒa**:　rˤ-rˤa:ʒil
落ちるPERF.3SG.M　DEF-夜　来るPERF.3SG.M　DEF-男

「夜になった。男がやってきた」[12]

(45a) では，主語の明示されていない完了形の動詞のあとに，それとは主語の異なるVS型の文が接続詞によって繋がれており，(45b) では，主語の異なるVS型の文が並べられている[15]。このような完了形のV型およびVS型の羅列によって表されているのは，ただ単に事態が起きた順序であり，主題化重文構文においてみられるような並列された事態どうしの関係（対立性，描写性，時間的近接性）は表示されてはいない。

すなわち，単に文を2つ並べたり，接続詞でつなげるだけでは，主題化重文構文に特有の意味は生じないということになる。では，何がこの主題化重文構文をひとつの独特な構文たらしめているのか。それは，主題化重文構文にみられて，(45a, b) に見られない唯一の違いである主題化にほかならない。

そこで，主題化が，文のグループ化という機能にいかに関わっているかが問題となるが，これには主題をもつ文の，構文としての有標性が関係していると考えられる。「3.2. 動詞文の主語」で述べたように，主題をもつ動詞文は，動詞文全体の1割を占めるに過ぎない。それゆえ主題をもつ動詞文は，他の文よりも際立っているということになる。しかも，この主題化重文構文の場合は，そうした際立った文が連続するわけであるから，この構文に含まれる文は，なおさら他の文から切り離されたグループとして認識されやすいといえる。

さらに，文のグループ化において主題化がもうひとつの重要な役割を果たしているのも見逃すことはできない。それは，動詞文と名詞文という異なる文構造をもつ文をグループ化するという役割である。

主題化とは，ある構造を持った文を「主題の部分とそれ以外の部分の2つから構成される構

[15] 今回使用した資料ではVS w-VSという例は見当たらなかった。

造」（野田 1994: 50）に転換することである。これをこの言語の動詞文の主題化について考えると，それは動詞述語を中心として成立する動詞文を主題（T）と評言（C）の二項構造へと転換することにほかならない。これは次のように模式化することができよう。

(46) V > T C
（ただし，TはTs，To，Tcompのいずれかである。）

いっぽう，4.2. の (8) において，名詞文の構造を次のように表した。

(47) Tn　N（=(8)）

この名詞文のTnが，動詞文のTs，To，Tcompと同じような主題であるかどうかは議論の余地があるにしても，重要なのは，主題化によって，動詞文の構造が，名詞文と等しく二項構造となることである。いわば，主題化が，動詞文と名詞文の異なる構造を，ともに二項からなる構造へとそろえたということになる。主題化によるこのような構造的な均等化が，ひとつには既に述べたように，文のグループ化を成立させる基盤となり，もうひとつには，グループ化される文の組み合わせの選択肢を広げているといえる。すなわち，主題化によって達成される，動詞文どうし，名詞文どうし，そして，動詞文と名詞文という幅広い組み合わせが，主題化重文構文の多様な表現性と，この構文がもつ重要性を生み出していると考えられる。

9. 結論

本稿では，主題をもつ文が接続詞 *w-* によって繋げられる構文を，主題化重文構文と名付け，その特徴と意味の記述を行なった。

この構文には動詞文と名詞文の双方が現れることができ，その構造は次のように一般化することができる（Ts，To，Tcomp，TnをT，評言であるVとNを述語Pとする）。

(48) TP　w-TP（ただし，さらに複数の w-TP が後続しうる）（=(25)）

この構文の意味は次の3つに分けることができる。

(49) 主題化重文構文の3つの意味（=(26)）

a. 事態の対立を表す
b. 状況や事物を描写する
c. 事態の時間的近接性を表す

この3つの意味は，主題どうしの関係と述語の性質によって決まるものであり，この主題ど

うしの関係を基準にして次のように整理することができる。

(50)　主題化重文構文における主題と意味の関係（=(44)）

a. 二項対立的な主題：事態の対立を表す

b. 状況・対象に備わる特徴的な事物が主題：状況や事物を描写する

c. 文脈上共通する主題：事態の時間的近接性を表す

さらに，本稿ではこの主題化重文構文における主題化の機能について考察し，主題化が文をグループ化していることと，動詞文を名詞文と同じく二項構造にすることによって構造を均等化していることの2点を指摘し，これがこの構文の多様な表現性の基盤となっていることを論じた。

この主題化重文構文は，対立や描写，時間的近接性などの表現を通じて，語りに生き生きとした変化を与える重要な構文である。本稿では，そのような語りの次元において，主題化という現象が深く関わっていることの一端を明らかにした。

略号

1, 2, 3:　1人称，2人称，3人称
-:　形態素境界
ACC:　対格人称接尾辞
AP:　能動分詞
C:　評言
COMP:　主語と目的語以外の補語
DEF:　定冠詞
F:　女性
GEN:　属格人称接尾辞
IMPF:　未完了形
M:　男性
NEG:　否定辞もしくは否定に関与する要素
O:　目的語
P:　述部
PERF:　完了形
PL:　複数
PP:　受動分詞
S:　主語
SG:　単数
T:　主題
Tcomp:　主語と目的語以外の補語が主題化されたもの
Tn:　名詞文の主題
To:　目的語が主題化されたもの
Ts:　主語が主題化されたもの
V:　動詞
w-:　等位接続詞 *w-*《そして》

参考文献

福嶌教隆 (2004) 「スペイン語の主題に関する記述的研究」In: 益岡隆志 (編) (2004), 129-148.

熊切拓 (2018a) 「アラビア語チュニス方言の「SV」語順と主題化」第156回日本言語学会大会口頭発表予稿集, 289-294. 日本言語学会.

熊切拓 (2018b) 「アラビア語チュニス方言における主題化」『東京大学言語学論集』40: 119-133. 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部言語学研究室.

Marçais, William et Guîga, Abderrahmân (1958-1961) *Textes arabes de Takroûna. II. Glossaire.* Paris: Bibliothèque de L'École des Langues Orientales Vivantes.

益岡隆志 (編) (2004a) 『主題の対照』（シリーズ言語対照〈外から見る日本語〉第5巻）. 東京: くろしお出版.

益岡隆志 (2004b) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」In: 益岡隆志 (編) (2004), 3-17.

西光義弘 (2004) 「英語のトピック構文」In: 益岡隆志 (編) (2004), 115-127.

野田尚志 (1994) 「日本語とスペイン語の主題化」『言語研究』105: 32-53.

澤田浩子, 中川正之 (2004) 「中国語における語順と主題化—主題化とその周辺の概念を中心に—」In: 益岡隆志 (編) (2004), 19-42.

柴谷方良 (1990)「主語と主題」近藤達夫 (編) 『講座日本語と日本語教育12 言語学要説（下）』97-126. 東京: 明治書院.

米田信子 (2004) 「マテンゴ語の主題—他のバンツー諸語との比較から—」In: 益岡隆志 (編) (2004), 171-190.

The Meaning of the Compound Topicalized Sentence in Tunis Arabic

KUMAKIRI Taku
cyberbbn@gmail.com

Keywords: Arabic, Dialect, Topicalization, Construction, Compound Sentence

Abstract

Tunis Arabic employs a construction of two or more topicalized sentences connected by a conjunction, *w*-"and." This paper examines this "compound topicalized sentence," which can be formalized as "TOPIC + COMMENT w-TOPIC + COMMENT." While this construction is usually formed by verbal sentences, combinations of nominal and verbal sentences and of two or more nominal sentences are also common. This "compound topicalized sentence" expresses three meanings: (i) contrasting situations; (ii) describing a situation or an object; and (iii) stating simultaneous events. A mutual relationship among the concerned topics, as well as the characteristics of the predicates, plays a key role in the choice between these meanings. Arguing for the role of topicalization in this construction, this paper concludes that topicalization has two functions: grouping sentences, and the structural leveling of nominal and verbal sentences.

（くまきり・たく）